

「誤りを考察する第二十三章」

有（輪廻）の継続は本性が欠如すると示す＞煩惱が本性として有ることを否定する＞ [章の著述を説く]

ここで言う。「有（輪廻）の継続はまさしく有る。（何故ならば）その因がある故である。ここで、諸煩惱より業が起こり、業と煩惱である因を持つ、一から一へと連なる生と死も生じることになるが、それもまさしく有（輪廻）の因であると考え。継続と説かれる。その主要な因とは諸煩惱である。（何故ならば）煩惱を捨て去った者達にはそれが無い故である。それら貪欲等の煩惱は有るのであり、それ故に、果となる有（輪廻）の継続も有るとなるだろう。」

章の著述を説く＞煩惱は本性があることを否定する＞ [縁起の理由によって否定する]

述べよう。もし、その因となった諸煩惱があるならば、有（輪廻）の継続も有るとなるが、有るのではない。如何様にといえば、ここで仏陀世尊方が、

貪欲と瞋恚と愚痴は、
妄分別より起こると説かれた。
好ましい、好ましくない、誤りに、
まさしく依拠したことより全く起こる。 1

妄分別とは分別（概念作用）である。妄分別より起こるので、「妄分別より起こる」という。

「欲よ。お前の根本は、知り、分別する（全く考える）ことより起こった。」

という偈が現れる故に、

「貪欲と瞋恚と愚痴等は、妄分別より起こると説かれた。」

これらのみが主に取り上げられたことは、他の諸煩惱はこれらの因を持つものであるので、（これら三つが）主要となる故である。それらの三煩惱は、

「好ましい、好ましくない、誤りに、まさしく依拠したことより全く起こり」、

そこで好ましい対象の様相に依拠して貪欲が起こるが、好ましくないものに依拠して瞋恚が起こる。誤りに依拠して愚痴が起こる。妄分別は、それら三つともにも生じさせられる為に、共通の因である。

また、如何様に愚痴が妄分別より起こるのかといえは。

述べよう。世尊が『縁起経』より、

「比丘達よ。無明とは因と共にあり、拠所と共にあり、縁と共にある。
比丘達よ。無明の因は何かといえば、正しくない作意である。」
や、その如く、
「穢れのある作意とは、愚痴より生じるのである。」
と説かれた。それ故に、無明と妄分別より起こるとなる。それ故に、

好ましいと、好ましくないと、
誤りに依拠して起こるもの。
それらは本性より無く、
それ故に、煩惱は清浄に無い。 2

もし、貪欲等の諸煩惱が本性として成立したのであれば、本性は作られたのではない故と、他に相互関係したことは無い故に、それらは好ましい・好ましくない・誤りに依拠して起こらないものであるが、好ましい・好ましくない・誤りに依拠して起こるのでもあり、それ故にそれらは本性がまさしく無いのであるが、清浄に有るのではなく、「勝義として、本性として有るのではない。」という意味である。

煩惱は本性があることを否定する>拠所は本性として無いという理由によって否定する>

[我は拠所として無いという理由によって否定する]

他にも、

我の有性と無性とは、
如何様にも成立する¹ことは無い。
それが無く、諸煩惱の
有性と無性は如何様に成立しようか。 3

我の有性と無性が如何様に有るのではないかは、詳細に既に述べた。それ故に、それに依拠した法（現象）の有性と無性が有ると、何処でなろうか。

『仮に、もし我の有性と無性が無い時に、それからそれらの有性と無性が無いとなるここで、諸煩惱より何が起こるのか?』といえば。

述べる。

¹ 成立する：『根本中論』第 23 章 3 偈では「成立した」。

これらの煩悩は何のものであるか。
 それも、成立することは有るのではない。
 何も無いものに、何のものとしても、
 諸煩悩は有るのではない。 4

ここで、これらの煩悩は壁面の絵やまさしく熟した果の如く、生じさせられるものであり、依拠したものに相互関係したのである。それ故に、これらは何かの（所有する）ものであるとなるが、無である何らかの拠所においてではない。その拠所も考察されれば、我か心であるものであるが、それらのその拠所は先に既に否定した故に、有るのではない。その拠所が何も無く、何の（所有する）煩悩であるとなろうか。

「それはまさしく無い故に、何のものでもない。」と説く。

「何も無いものに、何のものとしても、諸煩悩は有るのではない。」

拠所は本性として無いという理由によって否定する> [心は拠所として無いという理由によって否定する]

「ここで、先に成立した諸煩悩の拠所は何も承認しないが、まさしく拠所として設けられる『我』というものは、何も有るのではない。(何故ならば) 因が無い故に、虚空のマンゴーの木の様である。ならば何かといえば、煩悩を持つ心に依拠して諸煩悩は生じるとなるが、その心も諸煩悩と一緒に生じる。」と言う。

「これも正理ではない。」と説く。

自らの身体を見る如く、諸煩悩は、
 煩悩を持つものに五様相として無い。
 自らの身体を見る如く、煩悩を持つものは、
 煩悩に五様相として無い。 5

「自らの身体」とは、色等の定義の集まりである。自らの身体への見解とは「自らの身体を見る」一我と我所の様相として捉えることに入ったのである。斯くもこれは、

「蘊ではなく、蘊より他でもない。それに蘊は無く、それにそれは無い。
 如来は蘊を具えるものではない。」²

という本偈によって五様相について尽く分析したならば、自らの身体に有るのではないが如く、諸煩悩も五様相において分析したならば煩悩を持つものに有

² 「蘊…ではない。」:『根本中論』第 22 章 1 偈前 3 行。

るのではない。そこで、煩惱化するのを、諸々の「煩惱」である。煩惱化されるので、「煩惱を持つもの」である。

そこで、「煩惱を持つものであるそれ自体が、諸煩惱である。」とは正しくない。(何故ならば) 燃やすものと燃やされるものもまさしく同一である背理となる故である。「煩惱を持つものも他であるが、諸煩惱も他である。」とも正しくない。(何故ならば) 他においては相互関係が無い故に、諸煩惱は煩惱を持つものである因より起こっていない背理となる故である。そのもの(同一)と、他そのものが無いまさしくそれ故に、所依³能依⁴や、それを具える方向は無いので、諸煩惱に煩惱を持つものは無いが、煩惱を持つものに諸煩惱は無く、煩惱を持つものは諸煩惱を具えるのでもない。そのように五様相において分析したならば、諸煩惱は煩惱を持つものに有るのではない。

斯様に煩惱を持つものである因を持つ、諸煩惱が有るのではないが如く、煩惱である因を持つ煩惱を持つものも五様相によって分析したならば、諸煩惱に有るのではない。

このように諸煩惱自体は、煩惱を持つものではない。(何故ならば) 行為者と行為対象がまさしく同一である背理となる故である。

諸煩惱も他であるが、煩惱を持つものが他であることもない。(何故ならば) まさしく相互関係が無い背理となる故である。

煩惱を持つものに諸煩惱は無いが、諸煩惱に煩惱を持つものは無く、諸煩惱は煩惱を持つものを具えるのでもない。

そのようであれば、自らの身体を見る如く煩惱を持つものも諸煩惱に五様相として有るのではない。何故ならば、そのようである故に、煩惱と煩惱を持つものは相互関係して成立したことも有るのではない。

煩惱は本性があることを否定する> [因は本性として無いという理由によって否定する]

ここで言う。「もしまた、君が諸煩惱を否定はしたが、そう見るとしても煩惱の因である好ましいと、好ましくないと、誤りは、先ず有るのである。それが有るので、諸煩惱も有るとなる。

述べよう。もし好ましいと、好ましくないと、誤りそのものが有るならば、諸煩惱は有るとなるが、何故ならば、

好ましいと、好ましくないと、誤りの、

³ 所依^{しよえ}：よりどころ。

⁴ 能依^{のうえ}：よるもの。

それらも

本性より有るのでなければ、

一縁起生である故と、否定を説くことになる故である。そのように本性として有るのではない時、

好ましいと、好ましくないと、誤りに、
依拠した煩悩は何ものであるか。 6

『好ましいと、好ましくないと、誤りというその諸因は無いので、諸煩悩はまさしく有るのではない。』とのお考えである。

煩悩は本性があることを否定する> [対象は本性として無いという理由によって否定する]

ここで言う。「諸煩悩はまさしく有る。(何故ならば) それらの対象がある故である。ここでも、無には対象が有るのではなく、例えば石女の子の如くである。色形と、音声と香と味と触感と法(現象)という六対象は有るのであり、それ故に対象があるので、諸煩悩はまさしく有ると述べられる。君達によって

色形と音声と味と触感と、
香と法(現象)の六様相は、
拠所であり、貪欲と瞋恚と、
愚痴のものであると考察された 7

ものは有る。そこで、それより生じる故に貪欲等はここに留まるので、拠所一対象である。その対象も、色形と音声と香と味と触感と法(現象)という六つとなる。(何故ならば) 肯定認識する六根(六感覚器官)が互いに別である故である。

そこで、「これは、これにおいてである。」「あちらは、あちらのものである。」と確かに考察され得る故と、「色形に適するので、色形である。」「これによって意味を朗誦し示すので、音声である。」「吸い、嗅がれる対象であるので、香である。(何故ならば) 行ったところより他へ行かぬ故である。」「味わい、味が経験される対象であるので、味である。」「触られる対象であるので、触感である。」「自らの定義を保持する故、または法(現象)の最高のものである涅槃を保持するので、法である。」それら六つの様相は礎である。「何の(礎か)」といえ、貪欲と瞋恚と愚痴の(礎)である。

それに喜ぶので貪欲であり、執着しことさら欲すことである。あるいは、こ

れによって心を喜ばせるので、貪欲である。批判するので瞋恚であり、全てより害する思いである。あるいは、これによって心を邪魔するので、瞋恚である。愚昧であるので愚痴であり、全て（の様相）から愚昧である。あるいは、これによって心を愚昧にするので、愚痴である。

それ故に、色形等の六様相はこれら煩惱の礎であり、対象である。そこで色形等を好ましい様相に捏造するので、貪欲が生じる。好ましくない様相に捏造するので、瞋恚（が生じるの）である。恒常や我について誤って捏造したので、愚痴が生じることになる。

「これら六様相が礎として仮設されることは、勿論真実ではあるけれど、しかしながら眼障を持つ者達が有るのではない落髪等を見るように、有るのではない本性となったそれらのものを、君が貪欲等の対象であると尽く仮設したのである。」と示す為に、

色形と音声と味と触感と、
香と法（現象）ただそれだけであり、

と説かれた。「だけであり」とは、「ただ仮設されただけのものに尽き、本性は無い。」という主旨である。

「もし本性が無ければ、ならば如何様に対象としたのか。」といえば。

述べよう。それらの対象とは、

尋香の都のようであり、
逃げ水や夢に似るのである。 8

それらが尋香の都等のように、誤りから対象とされるのみに尽きる時、

幻の人のようであり、
映像に似たそれらに、
好ましいや好ましくないものが、
起こるとも、何処でなろうか。 9

これによって、誤った拠所より起こったことと、好ましい・好ましくないという諸様相も、まさしく偽りとなる。斯くも、

「我執より起こった諸蘊。その我執は意味として誤りである。偽りであ

るその種子の、生が真実であると何処でなろうか。」
と説かれた。

煩惱は本性があることを否定する>因は本性として無いという他の理由によって否定する>

[貪欲と瞋恚の因が本性として成立したことを否定する]

拠所がまさしく誤りであるので、好ましいと好ましくないという諸相は、偽りのみであるに尽きず、しかしながらこの道理によっても「この二つはまさしく偽りである。」と示す為に、

それに依拠して「好ましい」と
名付けられる「好ましくない」は、
「好ましい」に、相対しておらずに有るのではないので、
それ故に、「好ましい」は合理ではない。 10

と説かれ、ここでもし「好ましい」という何かが有るならば、「好ましい」と関係を持つ他の事物との相互関係と共にある故に、確実に「長短」や「あちらこちら」のように「好ましくない」に相対することになるが、「好ましくない」ものに依拠し、「好ましくない」ものに相対して「好ましい」と名付けられ設けられる、相対相手であるその「好ましくない」も、「好ましい」無くして有るのではなく、「好ましい」に相対しておらずに「好ましくない」は有るのではなく、『好ましい』に相対すること無く『好ましくない』は無いのである。」という意味である。「それに」という言葉は直前の「好ましくない」が当てられる。「名付けられる」とは、前の「好ましい」に繋げる。

「何故ならば、そのようであれば『好ましい』と名付けられるにあたり、『好ましくない』という他の関係を持つ事物である相対対象が有るのではない故に、『好ましい』は合理ではない。『短い』が無いことによって『長い』が、『あちら』が無いことによって『こちら』が不合理である如くである。」というお考えである。

ここで、「好ましくない」が如何様に有るのではないかを示す為に、

それに依拠して「好ましくない」と、
名付けられる「好ましい」は、
「好ましくない」に相対せずに有るのではないので、
それ故に「好ましくない」は合理ではない。 11

と説かれ、もし「好ましくない」という何かが有るならば、「好ましくない」は

関係を持つ他の事物に相対している故に、それは確実に「長短」か「あちらこちら」のように「好ましい」に相対したとなるが、「好ましい」ものに依拠し、「好ましい」ものに相対して「好ましくない」と名付けられ設けられる、相対対象であるその「好ましい」も、「好ましくない」無くして有るのではなく、「好ましくない」に相対しておらず「好ましく」有るのではなく、『好ましくない』に相対無くして『好ましい』は無いのである。」という意味である。これも「それに」という言葉によって直前の「好ましい」が捉えられる。「名付けられる」とは、前述の「好ましくない」に当てる。

何故ならば、そのようであれば「好ましくない」と名付けられるにあたり、「好ましい」という関係を持つ他の事物である相対対象が有るのではない。

「それ故に『好ましくない』は合理ではない。」

という。

何故ならば、そのように「好ましい」と「好ましくない」は有るのではない故に、

「好ましい」が有るのでなければ、
貪欲が有ると何処でなろうか。
「好ましくない」が有るのでなければ、
瞋恚が起こると何処でなろうか。 12

『好ましい』と『好ましくない』の様相が無ければ、因が無い故に、『好ましい』と『好ましくない』という様相である因を持つ貪欲と瞋恚も有るのではない。」というお考えである。

因は本性として無いという他の理由によって否定する>愚痴の因が本性として成立したことを否定する>誤りが本性として成立したことを否定する> [常見が誤りとして、本性として成立したことを否定する]

それ故に、そのように「好ましい」と「好ましくない」の様相は無いので、貪欲と瞋恚の二つは無いと示して、ここで誤りが無いと示した面より愚痴も無いと示す為に、

もし、無常を恒常であると、
そのように捉えることが誤りであるならば、
空に無常は有るのではないので、
捉えることは如何様に誤りでないのか。 13

と説かれ、ここで誤りを四つと述べられた。(それは) このようであり、刹那毎

に壊れ無常である五蘊を『恒常である。』と捉えることは、誤りである。その如く、

「無常であるものを確実に害する。害のあるものは楽ではない。それ故に、無常であるもの、それは一切が苦しみとなる。」⁵

というこのあり方で、無常であるものは苦しみであるが、一切の行も無常であり、それ故に苦しみの我性を持つ五蘊を『楽である。』と誤って捉えることは他の誤りである。

その如く

「精液と血が合わさった種子を持つ、大便と小便によって生じさせられた、不浄な本性を知りながら、如何なる欲望がそれに執着しようか。」

というように、常にこの身体は一切の我性において不浄でありながら、蒙昧がそれをまさしく清浄であると捉えることは、誤りである。

その如く、我の性相と合致しない五蘊は無常である故と、生じ壊れる主体である故に、我は無く、我の本性が欠如しながらそれを恒常であると捉えることは、無我を我であると頭かに執する誤りである。

そのようであれば、それら四つの誤りは愚痴の因となるものである。

今ここで、これを分析しよう。もし、「恒常性が欠如する諸蘊を恒常であると捉えることは間違い—誤りである。」とそのように設けるならば、本性が欠如する蘊において、無常も無いのではないのか？それ故に、

「空に無常は有るのではないので、捉えることは如何様に誤りであるのか。」

このように、「誤りのない無常性に相對して、恒常は誤りである。」と設けられるのであれば、空に無常性があるのではない時、無常性は無いので、それに反する恒常性が誤りであると、何処でなろうか。それ故に、誤りは無い。

斯様に本性と離れ、本性として生じていない空において無常性は無いが如く、苦も無く、不浄も無いが、無我也有るのではない。本性が欠如するので苦等が無い時、それらと不一致の方向となる恒常と、楽と、清浄と、我も誤りであると、全く何処でなろうか。

それ故に、誤りは本性として無い。それが無い故に、無知があると何処でなろうか。(何故ならば) 因が無い故である。

斯くも世尊が、

「無明と無命の縁によって起こったものは、いつ時にも有るとなるのではなく、その無明は世間に有るのではない。それ故に私はこれを無明であると説いた。」

⁵ 「無常・・・となる。」:『四百論』第 2 章 25 偈。

や、その如く、

『世尊よ。如何様であれば、愚痴は摂持の言葉でありましょうか。』
世尊がお言葉を賜れた。

『文殊よ。愚痴とは、よく解放されたものであり、然れば愚痴という。』
等を説かれた。

誤りが本性として成立したことを否定する>

[無常であると捉えることは誤りではないと、本性として成立したことを否定する]

他にも「もし、まさしく正しくない故に、無常を『恒常である』とそのままに捉えることは誤りであると設けるならば、そう見れば、本性として有るのではない事物について『無常である。』と捉えることも有るのではないので、これも何故誤りでないと設けるのか。」と示す為に、

もし、無常を恒常であると、
そのように捉えることが誤りであるならば、
空を無常であると、
捉えることも如何様に誤りでないのか。 14

と説かれ、恒常性と無常性の双方ともが誤りである時、その時に誤りではないとなる、それらより別である他の第三（分類）は有るのではないが、誤りでないものが有るのではない時、何に相對して誤りであるとなろうか。それ故にこの正理によっても、誤りは有るのではない。それが無い故に無明は無い。

斯様に無常を「恒常である。」と捉えるこれが誤りとならぬが如く、有るのではない残余の誤りにも当てはめたまえ。

まさしくそれ故に、世尊が『聖堅増上心請問經』より、
「世尊がお言葉を賜れた。

『種姓の子よ。道の出離を尽く探求する者はその如くであり、種姓の子よ。如来は執着することになる諸法を捨て去られたので、欲望を⁶捨て去ったと説かれなかった。その如く、怒るであろう対象と、蒙昧となるだろう（対象の）諸法を捨て去って、如来は瞋恚と愚痴が捨て去られると説かれなかった。

それは何故かといえ、種姓の子よ。如来は、如何なる法（現象）であろうとも、捨て去られる為か、得られる為に法は示さない。尽く知られる為に、尽く捨てられる為に、修される為に、実現される為に、直接

⁶（捨て去られ・・・欲望を）：北京版・ナルタン版には無い。

に悟られる為に、輪廻より揺動される為に、涅槃へ行かされる為に、斥けられる為に、設けられる為に、分類される為に、法を説かれない。

種姓の子よ。二つに分けることは、如来方の法性ではない。それら二元において行為することは、清浄に入ったのではない。

種姓の子よ。二元とは何かといえば、『私が、欲望を捨て去ろう。』と思うことは二元である。『私が、瞋恚を捨て去ろう。』と思うことは二元である。『私が、愚痴を捨て去ろう。』と思うことは二元である。

そのように行為するものであるそれらは、清浄に入ったのではなく、それらは誤って入ったと知りたまえ。

種姓の子よ。このように、例えばある人々は魔術師の奏でる音楽が起こった時、魔術師が変幻させた女性を見て欲望の心が起こされ、その者は欲望によって心が導かれて(女性に近寄るが)、取り巻きによって恐れ、恥ずかしくなり、席より立って去る。その者は去って、まさしくその女性を好ましくないと作意し、無常や、苦や、空や無我であると作意するならば、種姓の子よ。それをどう思うか。その人は正しく入ったのか？あるいは誤って入ったのか。』

申し上げた。

『世尊よ。女性ではないものを好ましくないと作意し、無常や、苦や、空や無我であると作意する、その人の実際の努めは、誤りです。』

世尊がお言葉を賜れた。

『種姓の子よ。ここで比丘と比丘尼と、優婆塞と優婆夷の一部が、生じておらず起こっていない諸法について好ましくないと作意し、無常と苦と、空と無我であると作意することも、それに似ていると見よ。私は、それら愚か者達を〈道を修するのである〉とは言わず、それらの者を〈誤って入った〉という。

種姓の子よ。このように、例えばある人は眠りの夢の中で、我が家に王妃がやって来たと見て、彼女と共に眠り、記憶を無くして〈私は目が覚めた。〉とそのように思い、〈王が探してはいないか？彼が私を殺しに来る。〉と思い畏惧し恐れ逃げたならば、これをどう思う？その人は畏惧し恐れ逃げたことで、その王妃の(原因となった)恐怖より逃れるとなろうか？』

申し上げた。

『世尊よ。それはそのようではありません。それは何故かといえば、世尊よ。このように、その人は女性ではないものに女性という想(識別)を生じさせ、正しくなく思い込んだ為です。』

世尊がお言葉を賜れた。

『種姓の子よ。ここで比丘と比丘尼と、優婆塞と優婆夷の一部が無貪欲に対して貪欲の想を生じさせ、貪欲の恐怖によって畏怖し、貪欲よりの出離を尽く追求することと、その如く無瞋恚において瞋恚の想を生じさせ、無愚痴に愚痴の想を生じさせて、愚痴の恐怖によって畏怖し、愚痴よりの出離を尽く探求する者達も、それに似ると見よ。私は、それら愚か者達を〈道を修するのである〉とは言わず、それらの者を〈誤って入った〉という。

種姓の子よ。このように、例えばその者が無いにも拘らず捏造したことによって、恐れが無いものに恐れ of 想を生じさせた如く、種姓の子よ。凡夫である幼子達は、欲望の果てを知らずに欲望の果ての恐怖によって畏怖し、欲望の果てより出離することを探求する。瞋恚の果ては何も無い果てであると知らずに、瞋恚の果ての恐怖によって畏怖し、何も無い果てより出離することを探求する。愚痴の果てである空性の果てを知らずに、愚痴の果ての恐怖によって畏怖し、空性の果てより出離することを尽く探求する。私は、それら愚か者達を〈道を修するのである〉とは言わず、それらの者を〈誤って入った〉という。』

と、詳細に説かれた。

誤りが本性として成立したことを否定する > [ただ捉えることのみが本性として成立したことを否定する]

ここで言う。「もしまた、『恒常である。』とそのように捉える誤りは有るのではないようだとしても、先ず、その（誤った）認識は有るのである。『認識』とは捉えることであり、行為の本性を持つ事物である。それについても疑い無く、成立させるものである恒常性等、行為するものが有るとなる必要があるが、我、あるいは有情でも構わないが、行為者も存在する必要がある、色形等の対象である、行為対象も有る必要がある。行為と行為するものと行為者と行為対象等の諸事物が成立したのであれば、一切が成立したので、我々の主張が成立した。」

述べよう。君のこの論理は偽りであり、斯くも説かれた論法によって、

捉えるものと、捉えることと、
捉える者と、捉えられるものの、
一切は寂靜であり、
それ故に、捉えることは有るのではない。 15

ここで、恒常性等の特性をつけるものである、僅かな一部の（捉える）行為対象となった色形や音声等の事物を捉えるものである、その何らかの捉える者

が如何様に有るのではないのかは、先に既に示した。

如何様にといえば、どのようにまさしく恒常等である行為者が有るのではないかを、

「もし、無常を恒常であると、そのように捉えることが誤りであるならば、」⁷

等によって示したが、どのように捉える者が無いかは、

「我の有性と無性とは、如何様にも成立したことは無い。」⁸

というこれによって示し、その捉えられる対象もどのように無いかは、

「色形と音声と味と触感と、香と法（現象）ただそれだけであり、」⁹

によって示したのである。そのように行為者と行為するものと行為対象が成立していない時、理解されるものがない「捉えるもの」が有ると何処でなろうか。それ故に

『捉えるものと、捉えることと、捉える者と、捉えられるものの、一切は寂靜であり、』¹⁰

本性として生じていない故に一切は苦しみより超越したのである。」という意味である。何故ならば、これはそのようである

「それ故に、捉えるものは有るのではない。」¹¹

もう一様相においては、何故ならば「縁を考察する」¹²等の諸章によって、行為するものと事物と行為者と行為対象の一切は、一切の様相において生じていないと示された故に、「これら一切は寂靜であり、それ故に、捉えるものは有るのではない。」としたまえ。

愚痴の因が本性として成立したことを否定する>誤りを具えるものが本性として成立したことを否定する>

[具わるものは本性として無いので、具える者が本性として有ることを否定する]

ここで言う。「諸々の誤りはまさしく有る。(何故ならば) 誤りを具える者が有る故である。ここで誤りを具える祭祀は存在するのであるが、諸々の誤りが無ければ、誤りを具えることはあり得るものではない。それ故に、誤りは有るのである。」

述べよう。ここで、「行為するものと行為者と行為対象は無いので、捉えるこ

7 「もし…ならば、」:『根本中論』第 23 章 13 偈。

8 「我の…無い。」:『根本中論』第 23 章 3 偈前 2 行。

9 「色形と…であり、」:『根本中論』第 23 章 8 偈前 2 行。

10 『捉える…であり、』:『根本中論』第 23 章 15 偈。

11 「それ故…ではない。」:同上。

12 「縁を考察する」:『根本中論』第 1 章。

と自体が一切の様相において有るのではない。」とは、我々が既に説いた。
それ故に、

誤り、あるいは正そのものであると、
捉えるものが有るのでなければ、
何に誤りがあり、
何に誤らないものが有るのか。 16

僅かであろうとも誤り、あるいは正しく捉えるものに、「まさしく誤り」と、「まさしく誤りでない」というものが、何処にであろうか。それ故に諸々の誤りは無い。

誤りを具えるものが本性として成立したことを否定する > [誤りの拠所が本性として成立したことを否定する]

他にも、これらの誤りを何かにおいて主張するならば、誤りとなったものに考察されるのか？誤りとなっていないものか？誤りとなりつつあるものにおいて考察されるのか？と問えば、「一切の様相において合理ではない。」と示す為に、

誤りとなったものに、
諸々の誤りはあり得ず、
誤りとなっていないものに、
諸々の誤りはあり得ない。 17
誤りとなりつつあるものにも
諸々の誤りはあり得ない。
何に誤りがあり得るかは、
己自身で分析せよ。 18

と説かれた。そこで先ず「誤りとなったものに、諸々の誤りはあり得ない。」何故かといえ、このように、誤りとなったものはまさしく既に誤りに変化したのであれば、そこで再び誤りと関係することによって何をしようか。(何故ならば) 必要性が無い故である。

誤りとなっていないものにおいても諸々の誤りは不適である。(何故ならば) 無知の眠りと離れたことによって智恵の御眼が開かれた諸仏においても、誤りが有る背理となる故である。

その如く、誤りとなりつつあるものにおいても諸々の誤りは有るのではない。(何故ならば) 「誤りとなりつつある」は無い故であり、誤りとなったものと、

誤りとなっていないもの以外、「誤りとなりつつある」という他の事物は、何が有るとなろうか。

『誤りとなりつつある』とは半分誤りである。」といえは。

「半分誤り」というものは、僅か一部分のものが誤りとなり、僅か一部が誤りとなっていないのであるが、そこでこの、誤りとなった僅か一部においては、誤りが誤りとするのではない。(何故ならば)既に誤りに変化した故である。この、誤りとなっていない僅か一部も、誤りが誤りとするのではない。(何故ならば)誤りに変化していない故である。それ故に、誤りとなりつつある何かにおいても、諸々の誤りはあり得ない。

誤りになったものと、誤りになっていないものと、誤りになりつつあるものにおいてそれを見ることはあり得ないが、あり得ないので、「今何に諸々の誤りがあり得るのか？」と、自らが公正になって、知恵によって尽く分析したまえ。

それ故に、そのようであれば拠所が無いことによっても諸々の誤りは有るのではない。

誤りを具えるものが本性として成立したことを否定する > [誤りが本性によって生じたことを否定する]

他にも、

諸々の誤りが生じていなければ、
如何様であれば有るとなろうか。
諸々の誤りが生じることが無ければ、
誤りを持つものは何処にあろうか。 19

そこで、

事物は自らより生じず、
他よりまさしく生じるのではない。
自らと他よりでもないならば、
誤りを持つものは何処にあろうか。 20

「誤りを具えるものが何処にあろうか」という主旨である。

それ故に、「諸々の誤りは有る。誤りを具えるものが有る故である。」と言ったことは正しくない。

愚痴の因が本性として成立したことを否定する > [誤りの対象の有無を考察して否定する]

もしまた、四顛倒（四つの誤り）の僅か一部がまさしく有ると承認するならば、そう見るとしても、まさしく誤りとして設けられることはできない。何故かといえば、このように、

もし、我と、浄と、
常と楽が有るならば、
我と、浄と、常と、
楽は誤りではない。 21

もし、「それら我と清浄と恒常と楽は誤りである。」と設けるならば、それらは有るのか？無いのか？

もし有るならば、ならば誤りではない。（何故ならば）有る故に、無我等の如くである。もし無いならば、その時それらは無い故に、誤り自体が有るのではないのみに尽きず、「相對相手の誤りが無い故に、無我等、諸々の誤りでないものも有るのではない。」と示す為に、

もし、我と、浄と、
常と楽が無いならば、
無我と、不浄と、無常と、
苦は有るのではない。 22

と説かれ、もし『有でないものは誤りそのものとしてあり得ないので、我と清浄と恒常と楽は無い。』と思えば。

そう見るならば、ならば我等も有るのではない故に、無我等がまさしく誤りでないと捉えられることも、捨てられるものである。（何故ならば）否定対象が無ければ否定したことは無い故である。そのように無我等が有るのではない時、それも自らの本質として成立したことは無い故に、我等のように、如何様に誤りにならないのか。それ故に、解脱を欲する者達はそれらの八つとも誤りをも捨て去りたまえ。

愚痴の因が本性として成立したことを否定する > [そのように否定することは重要であると示す]

これらの誤りについての分析を斯様に説かれたこれは、無明等を捨て去る因そのものであるので、まさしく大きな意義を持つものであると示す為に、

そのように誤りが滅したことによって、
無明は滅すとなる。
無明が滅したとなれば、
行等は滅すとなる。 23

と説かれ、その瑜伽行者が斯様に説かれた正理によって誤りを捉えていない時、そのように誤りを捉えていないことによって、その因を持つ無明¹³は滅すことになる。それが滅したことによって、無明の因を持つ行等の、老死の果てに行きつく諸法（現象）は滅すことになる。（何故ならば）無明とは、煩惱の全ての集合と、生等の苦しみの因となる故である。身根（身体感覚器官）の因を持つ一切の形ある根（感覚器官）は、身根が滅したならば滅すとなるが如く、「諸々の輪廻の支分として起こる、無明の因を持つ行等は、確実に、無明が滅したならば滅すとなるだろう。」と示す為に、

「無明が滅したとなれば、行等は滅すとなる。」

と説かれたのである。

章の著述を説く > [その理由である、それを捨て去る方法が本性として有ることを否定する]

ここで言う。「もし誤りが滅したことによって無明が滅すならば、ならばそのように誤りが滅したことによって滅すとなるもの、無明は有るのであり、有るのではない虚空のマンゴーの小枝を捨て去る方法を探しても、有るものではない。それ故に、無明は有るのである。（何故ならば）それが滅す方法を探すが有る故である。それ故に、その因を持つ貪欲等の諸煩惱は有るのであるが、煩惱が有る故に、輪廻の継続もまさしく有るのである。」

述べよう。嗚呼！利他を現す為に何にも頼らず行き去った聖者方が、方便と智慧の力によって、一切の我性において非常に強力な痛みである煩惱の毒の大樹を残らず根こそぎにされたことに対し、益するに留まらぬのみならず、しかしながらそれを根こそぎにされた方々と非常に反して留まり、自ら捏造したその煩惱の毒の大樹を植え付けることに、事更に恭敬する者は、有意義でないことにまさしく非常に通曉した対論者である。

他にも、もし無明等の諸煩惱を捨て去ることが有るならば、それを捨て去る方法を探求することになるだろうが、それらを捨て去ることは有るのではない。

¹³ 無明：無知。輪廻の十二縁起の第一。十二縁起とは、輪廻に生を受ける十二段階。無明・行・識・名色・六處・触・受・愛・取・有・生・老死。

「何故か」といえば、ここにもし有るならば、その時、自らの本質として有るものにおいてか、有るのではないものに有ることになるものである。

「それよりどうなる」といえば、もし本性本質として有るとなる諸煩悩を捨て去ると主張するならば、それは不合理である。

「何故か」といえば、このように、

もし幾らかの煩悩である
 何かは本性として有るならば、
 如何様であれば捨て去られるとなろうか。
 有るものを誰が捨て去ろうか。 24

自らの本質として有る諸事物の本性は斥けることはできず、地等の本性である堅固等は、無くなるものではない。その如く、もし幾らか一プトガラの何か一無明等のこれらの煩悩も本性として有るならば、如何様であれば捨て去るとなろうか—何ものによっても、まさしく捨て去るとはならない。

また「何故に、それらを捨て去るのか」といえば。

「有るものを誰が捨て去ろうか。」

と説かれ、『本性は斥けられ得ぬ故に、虚空の不触性は斥けられることが無いが如くである。』というお考えである。

『仮に、本性として無いものであれば、』と考えれば。

「そのようであるとしても、捨て去ることはまさしく有るのではない。」と説かれた。

もし、幾らかの煩悩である
 本性として無いものは、
 如何様であれば捨て去るとなろうか。
 無いものを誰が捨て去ろうか。 25

本性として無い—存在していない諸煩悩も、まさしく捨て去られることはできない。有るのではない火の冷感、斥けられることはできない。その如くこれらの煩悩も、誰にも、何も本性として無いので、それらを誰が捨て去ろうか—誰も捨て去るのではない。

それ故に、そのように双方のようにも捨て去ることは有るのではないので、諸煩惱を捨て去ることは無い。捨て去ることが無い故に、煩惱を捨て去る方法の追求を見て、有ると何処でなろうか。

それ故に、斯くも「無明等はまさしく有る。(何故ならば) それを捨て去る方法を探すことが有る故である。」と言ったことは不合理である。

煩惱が本性として有ることを否定する> [了義の教証と合わせる]

斯くも『三昧王経』よりも、

「色形によっても菩提を示された。菩提によっても色形を示され、異なる諸々の音声によって、法の重鎮を良く示された。

『音声によって色形の重鎮を』とは、自性として深甚であることは、色形と菩提において平等であり、別とされるものは見付からない。

涅槃を深甚であるとも、音声によって良く示されたように、その涅槃は見付からない。その音声も見付からない。

音声と涅槃は、二つとも見付からず、その如く空である諸法（現象）において、涅槃を良く示された。

苦しみを超えたことと超えられるものに、涅槃は見付からず、これに諸法（現象）が入ることは無い。後がそのような如く、以前にも。

一切諸法（現象）は本性として、涅槃と等しく平等であると、仏法に勤められ、現れた者達は知る。」

と説かれたことや、その如く、

「智慧によって蘊が空性であることを知り、知って諸煩惱と同行せず、ただ述べるだけの面より述べ、涅槃の如く、この世間を分析したまえ。」

と説かれた。

煩惱が本性として有ることを否定する> [章の名を示す]

阿闍梨月称の御口より綴られた頭句より、「誤りを考察する」という第二十三章の解説である。